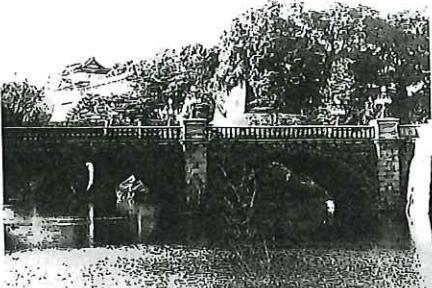
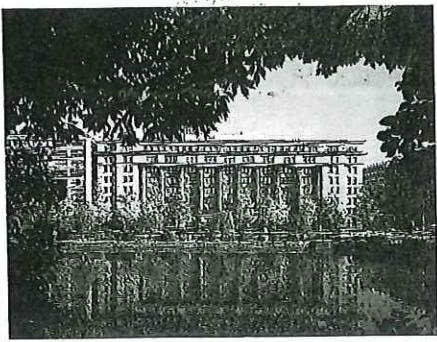


岳精流日本吟院



本館から二重橋を望む



明治生命本館

ちよふ

創刊号(1997年9月)

「吟は祈り、吟は故郷、吟は命なり」と言う。私達が吟ずる詩歌は、千数百年前から近世にいたる古典であります。古代からの長い年月、評価に耐えて伝誦されてきた詩であり、歌であります。その文語体の名調は先人の歴史を懐古し、勉学立志を語り、美しい愛と悲しい別離を描き、偉大な自然にとけ込む詩人の魂を歌いあげた詩歌です。

今春、T大学の入学式で、教育学部長は、「古典を十分読もう。現世の諸々の不祥事は、古典の読解不足から来ている」と、商業主義に走る世人に向かい喝破された。宜なる哉です。そして若者は、吟詠の詩をもつて古いと言ふ。戦後、自由と民主主義、平和の

思えば、戦後昭和二十一年の春
早朝、混沌として世情不安のなか
に過ぎていた我々の耳に、朗々と
すばらしい短歌の吟詠がひびき、
それは暗夜に希望の灯であつた。
「我が胸の燃ゆる思ひにくらぶれ
ば、煙はうすし櫻島山」（平野国
臣作）という短歌で、これが私に
とり、二十八歳の青年・宗家の吟
との出逢いでした。当時私は十九
歳でした。

爾来五十年、いま平成九年九月
一日、千代田岳精会が誕生し、こ
こに会員の皆様と共に、心より喜
びを頒ちあいたいと思います。こ
の喜びは、正に吟を頌える我等の
姿であり、心であります。

吟を追求し吟友集まる

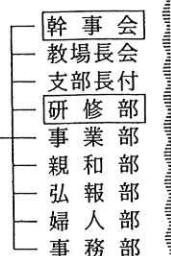
千代田岳精会誕生

吟子頌

會長 飯田龍鷹

運営体制

会長——副会長——
飯田龍麿 磯田眞風



理念の下、改革發展はあつたものの、良き風土の中で育つた幾つかの伝統習慣は、葬られ忘れ去られここに幾多の悲哀が生じています。正に心の復活、伝統の再興の叫ばれる所以です。

芸術は長く、人生は短しと言われるが、永遠の芸術として吟を追求し、人間の完成をめざす吟友はさらに相集う勢いです。世に有難きは友人。稍もすれば友の少なくなる大人にとり、老後に友の増える喜びは何にも代え難いものがあります。

同志同友が吟に集い、吟を頌ふて、今もこれからも幸いいっぱいに前進していきたいものです。

「馬上青年過 時平白髮多 残軀
天所許 不樂復如何」——墨痕鮮
やかな色 紙を現会長の飯田先生か
ら戴いた。今から十二年前の初春、人生の
あり方など、あれこれ考えていました
頃である。その先生が詩吟教室を開く由。
即座に入会を決意した。結果的には、会の第一号生徒となつた。今となつては誠に良き吟
縁を得たと思う。また流統は吟界重ね重
に誇る横山宗家の岳精流。重ね重ね良
縁に感謝の毎日である。思えば当時、一対一の教室で、
口移しで教えてくれた先生の苦労
は計り知れないと思う。会社の脅
威を願い、宮城のお壕りばまで足労
えを乞うた事も懐かしい。心底から吟に惚れ込んだ小生に

の場となつた。また当時の吟友は、いま、夫々の教場長に、師範に、また会の幹部として活躍し、若手の育成に頑張つてゐる。まさに吟縁に感謝の毎日である。

そして、このたび日出度く、会の昇格へ——。飯田会長!!『千代田岳精会』の誕生、本当に日出度うござります。

大兄の当初の苦労が大輪の花を咲かせました。一粒の麦が百粒を越えて会員も一二〇余名となりました。そして二〇〇九三〇〇名へと、益々の隆盛は指呼の間、正に期して待つべしです。

最後に、会長並びに会友の皆様の御健吟と吟楽人生を祈念して「吟恩感謝」結びとします。

副会長 磯田 真風

昭和六十年四月	教場開設
昭和六十一年六月	第一回温習会（会員27名）
昭和六十一年十二月	忘年温習会（会員30名）
平成四年二月	東陽町教場開設（二教場）
平成六年八月	千代田支部昇格記念大会（会員60名）
平成九年三月	平成八年十月 清水教場新設（会員90名） 神田教場新設
平成九年九月	ハザマ教場新設（六教場）
平成九年九月	千代田岳精会昇格（120名）
平成八年八月	会昇格を目指し六教場百名体制組織構想固め
平成八年八月	千代田の沿革



指導中の飯田龍鷹先生 (ハザマ教場の開設日)

現在、丸の内では第一（教場長・井手樹風）、第二（教場長・岩崎泰山）第三（教場長・鈴木重山）の三教場体制で運営されています。（各教場長談）（福島起泉）丸の内第一は、千代田の発祥教場です。現在、毎週木曜日、夕方五時半から七時まで指導・練習をしています。出席者は他教場の人も含め一五〇~一六〇名。テレマガが律詩でもない限り、全員、独吟が当ります。それが一巡しないと、今日の勉強は終了しません。

いま出席者の七〇~八〇%は女子が中心で、各人の持味を引きだすのに努力しています。“これが子がまだ少ないが、逆に、これから楽しみな人が多い”言葉の出し方につき、いつもアドバイスしていますが、語る調子の人がよいと思います。また勉強が終ったあとの懇親会が、年にぎやかで、お互いい、親睦の良い刺激となっています。

丸の内第二教場は、毎週、木曜日の昼、約一時間。出席者は多いときは一九〇名。

各教場の素顔

平成四年二月五日、「一吟洗心」をスローガンに開設され、スタート時の会員は三名でした。丸の内教場の岩崎、中村、伴先輩、平井さん、銀座三人娘など多数の方々の伴走で、よちよちスタートでした。それにしても忘れられず、特筆すべきは、今橋早苗さんの当時の

○東陽町・吟楽

が一時間で、何回もあたりますね。指導の際、伴奏のメロディを、声を大きく出すことに努めており、歌の心を、詩に生かす」といふことに取組んでいいわけで、歌謡を通じて吟のほうにも興味をもつてもらえたら」と。いま出席者の平均年令はウン十才? どうぞ皆さんも楽しくご参加を。

出席者のなかには茅ヶ崎伊東、八王子など遠方からの人も多かった。練習終了後は食事、喫茶、麻雀を楽しむグループと多少渋々丸の内第三は、平成九年一月からスタートした「歌謡教室」です。毎週、火曜日の昼休み時間に、練習をしています。参加者は、女子をを中心に一〇名前後で明治生誕現役のピチギヤル(①)が主力です。教本は、「日本叙事歌、童謡」です。CDを利用して、教室内に

練習の時間が少ないので、漢詩の解説は簡潔にポイントだけ。独吟のはか、吟ないし連吟も：。第二教場の特色は、有段者が比較的に多いことです。で、指導者が比較的には、いつも、母音をハッキリと④“とか、仮に間違つてもいいから、出来るだけ大きな声で、発声するようななどの強調点でしょ

存在、役割です。細かい気遣いといつも笑顔を湛えた早苗さんの、あの鈴を振るような九本の声が

平成八年十月に発足した教場です。清水建設の社員とOBで構成され、現在会員数は十五名です。月曜日隔週毎に、星と夜、本社と関連会社の一室で、飯田龍鷹・磯田眞風両先生の指導を受け、実習に励んでいます。

計割（企画・業務・親和・演奏・会計総務）を設け、会員相互の意気のあつた連係で運営しています。目下、安定会員三〇名の早期実現で「千代田会」の中心的教場となるよう、心を一つにして頑張っています。なお教場は毎週水曜日（午後五時半から二時間）磯田真風先生の指導で、勉強をしており（耳塚昇泉）

平成九年二月には五周年記念大会を開催、出席者六五名（外部招待者二〇名）に達し、大盛会でした。昨今は、「吟楽人生」——吟縁を大切に、吟恩を謳歌しようとの心が合言葉です。教場の運営は奉公で全員参加で、五つの役

存在、役割です。細かい気遣いといつも笑顔を湛えた早苗さんとの、あの鈴を振るようにな九本の声が、今東陽町で聞くべくもないのが

◎神田・対面で自然体

◎吟上達法(1)アラカルト

(1)母音：アイウエオンの音をきれいに出し、余韻をひく。

(2)鏡を見ながら練習：口を開いたつもりでも開いてないことが多い。口の形は次のように。

(3)ア 口を縦に大きく親指がくわに入 るよう、奥の方も十分に開く。

イ 口を横に開く、上下の歯が軽く 合う程度、唇はつき出さない。

ウ 唇をつばめて出す。上下の唇は ふれ合わさない。

オ 口を上下左右に十分開く。舌は 下歯のつけ根に。

ン 齧を丸く、のどの奥を開く気分。 声を鼻より出す。唇を閉じて (m) の音を出す。

千代田支部で一番新しい教場です。発足したのは平成九年三月五日。ハザマOBで、丸の内教場の佐藤昭二氏が発起人となり、ハザマOBの有志が参加しています。現在十八名の男性会員が在籍しており、平均年令は七十二歳。七

○ハザマ・元気熟年
教室の前を流れる神田川、その川の流れのように自然体で着実、前向きで会員相互の心のふれあいの場、「通うことが楽しみな教場」を目指しています。(林吾山)

十五歳以上四名と、詩吟に対しても情熱をもつて取り組んでいる熟年パワーあふれる元気いっぱいの、明るく楽しい教場です。

練習日は月三回、第一、二、四水曜日。十二時より十三時三〇分まで、ハザマ本社ビル地下二階の和室で開催しております。

現在、飯田龍鷹会長、鈴木重山教場長の熱心な御指導のもと、基礎をしつかり習得するため、一ヵ月一吟のペースで練習中。他教場の皆様、機会がありましたら、ぜひお立ち寄り下さい。お待ちしております。(城戸温)

⑤神田教場	副教場長代行
千代田区神田須町二一二七	飯田村上
新幹線高架下	大根恒道
千代田区ふれあい会館内	龍廬二郎
三三五二一五〇一一(林)	
教場長代行	
副教場長代行	
ザマ教場	
港区北青山二一五八(株間組内)	
三四〇五一一一一	
教場長代行	
副教場長代行	
福島吾山	
赴泉	
佐藤重山	
昭二	
城戸温	
鈴木重山	
内第三教場	
教場長鈴木重山	